

40 小夜の中山を歌とともにひもとく

筆 者 鈴木 克美

慶長6年(1601)に東海道が制定以来多くの人々がこの道を往来し、いまもなお昔を偲び、ここ小夜の中山を訪れる人々は少なくない。しかし掛川市民はもとより地元の人々からも忘れられかけていることが多い小夜の中山の話。少し私なりに思い返してみようと思う。歴史や記憶にたどるのだから間違いもあるかもしれないがそこは許していただきたい。

東海道小夜の中山峠は東海道の三大難所として庶民が街道を往来した江戸時代やそれ以前から知られている。

ここ久延寺は奈良時代、行基が開いたと伝えられている真言宗の寺で、この寺は、徳川家康との関係が深く、慶長六年(1600)、家康が掛川城主山内一豊に命じて観音堂を建立した由緒ある寺でもある。また、夜泣き石の伝説にまつわる子育て観音としても有名である。

家康は諏訪原城を攻めるために久延寺を本陣としたこともあり、この寺と徳川家康との関係は有名。家康は武田勝頼が守る諏訪原城を攻めるために久延寺を本陣としたこともあったが、遠州平定後もこの寺へしばしば遊びに来て、お茶をたてて過ごしている。

慶長五年(1599)、関ヶ原の戦いを起こす作戦のため、家康は会津の上杉景勝を征伐に行くことになった。一豊はひそかに家康に味方することにし、家康を小夜の中山で迎え接待した。このときつくったのが久延寺の茶室であるという。残念ながら宝永年間(1700年代)に消失したとのことで、現在は茶室の跡地があるのみである。このことを記録したのが、松平土佐守が建てた石碑で境内にある。

ここで、家康は名物の飴の餅を食したことや、はたまたわらび餅を食したとも言われているが定かではなく歴史の不確かなところを想像するのも楽しいかもしれない。

小夜の中山と言えば「夜泣石」。遠州七不思議の一つで、滝沢馬琴の石言遺響で各地に広まったようだ。物語は一般的には山賊に殺された妊婦から赤子が生まれ、その母の霊が傍らの石に宿り、石は赤子と一緒に夜毎泣き続けたという。子供は寺の僧によって飴で育てられた。やがて男の子は青年になり、母の命を奪った相手を見つけ、仇討を果たしたという内容である。この話が世に有名になったわけだが、ここには夜泣石は二つある。ここ久延寺にある夜泣石は蛇身鳥退治の物語で語られる小石姫(妊婦)の供養塔と言われている。

もう一つは、旧国道1号線沿いの小泉屋のそばにある夜泣石。それぞれにいわれがあり、滝沢馬琴の物語で語られた夜泣石は、広重の絵にも描かれていて、本物といわれている。

小夜の中山で私が記憶に残るのは生まれ育った母校日



久延寺夜泣石



小泉屋夜泣石

坂小学校の校歌だ。

♪とうげを越えた 西行や 今なお残る 夜泣石
古きをたづね 新しい 時代を学ぶ
わたしたち 希望は胸に ああおどる

この歌のごとく、私達地元の人達は地域の昔を大切にし、語りつづけたい。

さて、次の歌をご存じの人はいるだろうか。『小夜の中山』（静岡県郷土唱歌）という歌である。

♪峠の茶屋に 名物の 飴を求めて 立ちいずる
昔をしのぶ 並木道 ゆくてにかすむ 栗ヶ岳

今でも、日坂や菊川の里、金谷の人達がこの歌を大事に歌い続けていることを知りうれしく思う。

この歌にも出てきた、峠の茶屋「扇屋」が300年近くからの昔の姿を残したままたたずんでいる。この茶屋も代々守られて今に至っている。

約700年前、空道仙人より伝授されたと言われる子育て飴は「夜泣松子育飴」と書かれている。ちなみに、小泉屋は「夜泣石子育飴」と書かれている。これはそれぞれのいわれがあると思われる。夜泣松は蛇身鳥の物語からであり、夜泣石は先に記した誰もが知っている滝沢馬琴の物語からだと推察される。

それでは、夜泣松子育飴に関連する蛇身鳥物語（やいばのきじ）を以下に記してみる。

昔佐夜の中山に松村平内左エ門という、狩りの達人が住んでいた。一人息子の八太郎は、父の残忍な殺生をみかねて何回となくやめさせようとしていた。ある大雪の日、八太郎は佐夜の中山に潜り込み、父をいさめようと待っていた。

山の中をかけめぐり獲物を探していた父平内左エ門は岩間に黒い影を見つけ、弓矢を放ち殺してしまう。なんとそれは吾が子であった。これを知った母マツは、吾が子のむごい死と夫の不甲斐な仕打ちを深く悲しみ嘆き、遂に狂人となり大狂声を発し続け死んでしまった。やがてマツの霊は、世にも恐ろしき大怪鳥となって現れ出てきた。頭が鶏で胴体は大蛇の形象をして、両翼は異常に大きく強く、口端と脚の爪は太く長く鋭く尖り、キキキッと異様な鳴き声で、空天を乱舞し大地を狂走して、夜な夜な人里に出没した。この大怪鳥を人呼んで蛇身鳥と言ひ、恐怖の噂はたちまち世間に広がり、ついには京都にも伝わりやがて天皇（後宇多天皇）の耳にも達してしまう。天皇は村人の安住と旅人の安全を守るために、怪鳥退治することを決断、三条三位藤原良政卿を選び怪鳥退治を下した。

若き良政卿は蛇身鳥退治を誓い、佐夜の中山の山頂まで来て陣をはり退治の機会を狙っていた。ある日、清滝（菊水の滝）のほとりで琵琶を奏でる地の豪族である愛宕宗仲の娘、月



扇屋夜泣松子育飴



小泉屋夜泣石子育飴

小夜姫と白菊姫の姉妹を知り姉の月小夜姫の暖かい心にふれ、心の交わりを重ねていった。

その後、八ヶ月の長さにわたり蛇身鳥退治の策を練り、全力を傾けて好機を待ち続け、年が明けた二月八日の真夜中、佐夜の中山の山中にて、遂に蛇身鳥と相まみえる。大きな鳴き声を発しながら闇夜の空中を狂ったようにはばたき飛び回る身の丈六尺有余の蛇身鳥に毒矢を弓で引いて狙いを定めたとき、不思議なことに一瞬暗闇の中に光輝き、大怪鳥の姿が映し出された瞬間、矢は蛇身鳥めがけて討ち放たれ、天地を揺るがすような大音響とともに、蛇身鳥は地上に打ち落とされ、長き苦闘もめでたく終わりを告げた。

良政卿はその後月小夜姫に心をひかれ、しばらくこの地に滞在をしていたが天皇に蛇身鳥退治を報告するため京に戻ることにになり、別れ際に良政卿は月小夜姫に深き約束をかわし、自分の信仰する大切な観世音菩薩の佛像を形見として、また、身代わり守護として与えて行った。

京に戻った良政卿は天皇に蛇身鳥退治の報告をし、恩賞として天皇最愛女官である万寿前を嫁にもらう。天皇の御心に背くことも出来ず正室として迎え入れたが、その後月小夜姫との約束を万寿前の方に打ち明け理解を得て、月小夜姫を京の菊丸殿に呼び寄せた。幸せな日々が続く、良政卿の間に小石姫と香蘭丸の二児が生まれるが、その頃より正室の万寿前の方の妬みを受けるようになり、月小夜姫は難をさけるため吾が子連れ、橘主計助、弟主税、従者達を共に西坂（佐夜の中山に登る途中）の崖のくぼみに、住むことになる。その後、月小夜姫は亡き父母の霊を弔うために出家の身となり、諸国を行脚した。禪尼八ヶ月過ぎた頃佐夜の中山に戻るが、旅の疲れと病魔のため、床に伏してしまう。医薬静養の甲斐もなく死が近づいていると知ると、禪尼は病床で吾が子たちの行く末を案じ、娘の小石姫と自分たちの従事である橘主計助との婚約を決め、小石姫にその事をとくと言い聞かせたが、時すでに遅く小石姫はすでに、他人の子どもを宿していることをに、深く悲嘆にくれながら、息を引きとった。

小石姫は中山寺の住職で、足利尊氏の伯父に当たる空叟上人の子供を宿していた。小石姫は母、月小夜姫の遺言ともなってしまった橘主計助との婚約の言葉に、心を痛めながらも無事男の児（幼名月の輪童子）を出産した。

産後、二十日たった日に小石姫は、婚約の話を苦しみ、また吾が子の父とも添えない身の不幸、そして吾が子に対する思いを嘆きながら訣別を決意し、中山の松村平内左エ門（蛇身鳥退治物語の狩人）の地所内にある松樹の下で、自害し果てた。小石姫の靈魂は松樹に留まり、昼間は道行く人達に、己の悲運を語りかけるように鳴り続け、夜には悲しみに泣きくずれるかのように、泣き声が遠くに鳴り響き人々の耳に哀愁の情けを誘い続けた。

これを聞いた世の人々は、この松樹を夜泣松と名付け、後の世までもその悲運に情を捧げたとされている。小石姫の遺児は、月の輪童子と名付けられ、空道仙人の伝授した子育飴で、すこやかに育てられやがて立派な成人となって、後の龍峰弘雲禅師と言う有名な僧侶になったとのこと。

この話を聞いた人々が「夜泣松の皮を削り取り、燃やした煙を吸わせると立派な人になる」と伝え広まり、道行く人に松の皮を削り取られ、とうとう松は枯れてしまった。この松の跡に大きな丸石を置いて夜泣松の目印とし、小石姫の霊を慰めることにした。

以上が蛇身鳥にはじまる、夜泣松子育飴にまつわる話である。

世間には三大〇〇との言葉があるが、まさしく小夜の中山には、夜泣石にまつわるものに夜泣石、夜泣石にまつわるむかしばなし、子育て飴と三つそろうものがあり、小泉屋夜泣石と久延寺小石姫の供養塔（石）、夜泣石物語と蛇身鳥（やいばのきじ）のむかしばなし、夜泣石子育て飴（小泉屋）と夜泣松子育て飴（扇屋）、とそれぞれ相對する物が存在するというのもおもしろい事でもある。

小夜の中山には、江戸後期「飴の餅や」と呼ばれる茶店が24軒あったといわれている。『掛川市誌稿』によれば、久遠寺の西の北側を新茶屋沙弥屋敷、新茶屋の西を大松沙弥屋敷、久遠寺東の北側を南沙弥屋敷、久延寺の東南を大岩沙弥屋敷といい、それぞれの茶店で飴餅を売ることが幕府によって許可された、とある。

ちなみに、東海道には宿場ごとに名物があり、日坂は「わらび餅」・小夜の中山は「飴の餅」で白餅に琥珀色の水飴を塗った美しい菓子のこと。

小夜の中山の「飴の餅や」は繁盛していたのだが、明治13年（1880）日本初の有料道路「中山新道」が峠を迂回して開通したのを機に、旅人の往来が減り「飴の餅」は次第に消えて云った。

年たけて また越ゆべしと おもひきや

いのちなりけり さやの中山

小夜の中山公園の西行の歌碑を見ながら進むと右手遙かに栗ヶ岳が遠望できる。この栗ヶ岳山頂付近では無間の鐘が捨てられた井戸の跡を今でも見ることが出来、無間の井戸と伝えられている。

ここに伝わる「無間の鐘」伝説はこうである。旧東海道の難所「小夜の中山（佐夜の中山）」近くには、かつて曹洞宗の観音寺（栗ヶ岳）があった。この寺にある「無間の鐘」をつくと、この世では金持ちになれるが、その代償として来世では無間地獄に落ちるという。無間地獄は阿鼻地獄（あびじごく）とも呼ばれ、地獄の中で最も長く苦しみを味わう世界。「無間」は間断のないことを意味する。

昔、この「無間の鐘」を求めて大勢の人々が寺を訪れたが、危険な山道で多くの人が命を落とした。これ以上の犠牲者を出さないため、鐘は無間の井戸に投げ捨てられてしまったという。

この「無間の鐘」伝説を元につくられた、江戸時代中期の浄瑠璃では、手水鉢を無間の鐘になぞられて打つ演出が生まれ、この場面では長唄『傾城（けいせい）無間の鐘』が演奏された。

『源平盛衰記』を元にした江戸中期の浄瑠璃『ひらかな盛衰記』では、鎌倉幕府の御家人・



西行の歌碑



栗ヶ岳遠望



無間の井戸

梶原景季の妻・梅が枝が、夫の戦の費用を捻出するため、自分は地獄に落ちる覚悟で、「無間の鐘」に見立てた手水鉢を叩く。

梅が枝が手水鉢を叩く場面が、「梅が枝の手水鉢 叩いてお金が出るならば」という歌詞の由来となっている。

梅が枝の元の名は千鳥。夫(恋人)の梶原景季が父親から勘当された際、景季を経済的に支えるために「梅が枝(梅が枝)」と名乗る遊女になった。

景季の母・延寿は、二人のことをいつも気にかけて陰ながら見守っていた。

やがて戦が始まり、景季も出陣することになったが、肝心の鎧は質入れしてしまっていた。夫が戦に出て手柄を上げるにはどうしてもお金が必要。切羽詰まった梅が枝は「無間の鐘」の伝承を思い出し、庭の手水鉢をひしゃくで叩いた。すると、家の二階から三百両もの金が降ってきた。それは、陰ながら二人を心配していた景季の母・延寿からの情けの金だった。

余談だが、当地日坂まつりでは下町の町内が昭和のはじめ頃まで、“うめがえの ちょうずばち”と謡いながら笛や太鼓、大鼓などを屋台(朝顔方の山車)の中で演奏していたと、長老から聴いたことを懐かしく思うとともに、地元の伝説が忘れられていることに危機すら感じる。太鼓の演奏については、隣の東山口のおまつりで聞けるとか。いわれのある無形の物ではあるが、是非大切に残してもらいたいと願う。

ちなみに『梅が枝の手水鉢』の歌詞は、静岡県掛川市に伝わる「無間の鐘」伝説が元になっていて、江戸末期から明治初頭の作家・假名垣魯文(かながき ろぶん)の作とされる俗曲で、歌詞の元ネタは、『源平盛衰記』を元にした江戸中期の浄瑠璃『ひらかな盛衰記』の、梶原景季(かじわら かげすえ)の妻と梅が枝(うめがえ)に関連する場面によって由来しているとのこと。

(歌詞)

♪梅が枝の手水鉢 叩いてお金が出るならば

若しもお金が出た時は その時や身請けをそれたのむ

この先には、小夜の中山を行き来した人々が昔よりたくさんの歌を残していて、その代表的な歌碑が峠の街道沿いに続いている。

甲斐が嶺は はや雪しろし神無月

しぐれてこゆる さやの中山(蓮生法師)

馬に寝て 残夢月遠し 茶のけぶり

(松尾芭蕉・野ざらし紀行)

鎌倉時代中期の紀行文(街道記、十六夜日記)には、誰もが峠の手前で事任神社に願いをかけ、峠では小夜の中山の不安と寂しさを歌っていると書いている。

都から東へ下る旅人にとって、この峠はそれほど寂しい峠であったといえる。

すなわち、小夜の中山峠は、西から東に向かうときには、峠の入口にある事任八幡宮に無事に超えられることを祈り、峠にさしかかると沓掛で新しい草鞋や沓に履き替え、古い沓を木の枝に掛けて安全を祈る。さらにその上に道の真ん中にあった大きな丸石(後の夜泣き石)に向かって御幣を手向けて峠の神に安全を祈る、というように、順に山を越える心の準備を



蓮生法師歌碑

して峠越えをしたようだ。

東海道三大難所小夜の中山を遠い昔に想いをはせながら、歩いてみてはいかがだろうか。この先は、木々の生い茂るうっそうとした山道を歩くことになる。

ここで、三大難所といわれる、箱根峠、鈴鹿峠に馬子唄があるように、ここ小夜の中山峠にも残っているので紹介してみよう。

日坂馬子唄は保存会が結成されていたのだが、会員の高齢化に伴い、平成26年に解散してしまい、歌い手は現在ひとりとなってしまった。

日坂では、この“日坂馬子唄”（小夜の中山馬子唄・馬方節とも云う）や“箆かき節”（雲助節とも云う）が伝承されていて、“日坂茶節”・“日坂道中節”もあったと云われているが残念なことに現在は不明である。

ここに、日坂馬子唄、箆かき節の歌を紹介する。

日坂馬子唄

♪ 小夜の中山 夜更けちゃおよしナー
鹿の友呼ぶ 声がする

♪ 小夜の中山 疲れもしたがナー
登りゃうれしや 飴の餅

箆かき節

♪ 小夜のナー 中山ヨ 日坂宿の
茶屋の娘とヨ わらび餅だエ

♪ 小夜のナー 中山ヨ 涙の坂ヨ
あわれ語るかヨ 夜泣石だエ



現在は、土休祝日に開館している日坂宿“旅籠屋川坂屋”にて、団体のお客様や、希望する来館者に歌い披露している。

小石姫の妊婦塚や夜泣石跡を左右に見ながら足を進めれば、旅人を悩ませた急勾配の二の曲がり、胸突き八丁の沓掛けへと進む。やがて日之坂神社を過ぎるあたり、日坂宿が眼下に見え厳しかった中山峠を越えた安堵感から昔の旅人もホッと一息、日坂宿へ向かうのである。



小石姫の妊婦塚



夜泣石跡



二の曲がり

参考文献

『佐夜の中山“秘話”』 佐夜の中山子育飴本舗 末広荘扇屋

『東海道小夜の中山』 中部建設協会

『掛川市誌稿』

『怪鳥やいばのきじ』 静岡県のむかしばなし 静岡新聞社

『日坂小学校校歌』 作詞：岩崎 覚

『小夜の中山』 作詞：平松文平？ （静岡県郷土唱歌）

『梅が枝の手水鉢』 作詞：假名垣魯文 （戯れ歌）

『日坂馬子唄』 作詞：不詳

『籠かき節』 作詞：不詳

